

東洋興業会長 松倉久幸さんの 浅草六区芸能伝

【第84幕】

明けましておめでとうございます。

今回は、新年特別編。大衆芸能史研究家・お笑い評論家の西条昇さんに、フランス座出身にして浅草屈指の喜劇人、渥美清の魅力を、深掘りしていただきます。次号との前後編となりますので、心ゆくまでたっぷりお楽しみ下さい！

◇ ◇ ◇

何から影響を受けて、どのように芸を磨くことで、渥美清は映画『男はつらいよ』シリーズの車寅次郎役で見せた喜劇的演技に到達したのだろう。以前からそう考えていた僕は、古くから渥美の舞台を観ていた人たちに話を聞いてまわっていた。

本名は田所康雄。昭和3年3月10日、東京・上野に生まれる。板橋に転居したのが同11年だから、それまでに上野から程近い浅草で、まだ日比谷の東宝に去る前のエノケン（榎本健一）や古川ロッパの舞台を観ていたかどうか。渥美は作家の色川武大に、中学生時分から浅草喜劇をたっぷり観てまわった経験を話している。小学校を卒業した同15年から終戦までの浅草喜劇の状況はどうだったかと言えば、同17年に新生喜劇座を旗揚げしたシミキン（清水金一）が

突出した人気を誇り、他にロッパの抜けた笑の王国や吉本シヨウ、がま口。の愛称で親しまれた高屋朗の朗シヨウなどがあり、のちに初代おいちちゃん役を演じた森川信が同18年に新青年座を率いて関西から浅草に戻ってシミキンのライバルに浮上した。『男はつらいよ』の2作・8作・9作めで、渥美は『二二三浅草のホラチンガラホケキョーの帰り道』という出だして始まる『チンガラホケキョーの唄』を歌ったが、元は関西発祥の数え唄との説もあるものの、当時の流行歌の歌詞の語尾に『チンガラマンガラホイ』とつけて大きな口を開いて歌うのが売り物だった高屋朗の舞台を浅草で観て帰路につく渥美自身の経験がもとになっていたのではないかと。

戦後は上野でテキヤ仲間に入って寅さんでおなじみの口上を覚え、やがて友人の父親が座長をしていた一座に入り、埼玉県大宮市の日活館での『阿部

【今回の執筆者】

西条昇 江戸川大学メディアコミュニケーション学部 マス・コミュニケーション学科教授。大衆芸能史研究家、お笑い評論家、構成作家。メディアへの出演、新聞等への執筆、著書多数。



定一代記」で舞台を横切るだけの刑事C役で初舞台を踏む。その後は他の劇団を転々とし、かつて読んだ小説の主人公の名前である渥美悦郎を芸名とし、かつて読んだ小説の主人公に改めた。昭和25年にはストリップを上演していた赤羽公衆劇場に出演。翌26年にはストリップの浅草百万弗劇場の専属コメディアンとなる。ここでは、責め絵で有名な伊藤晴雨の作・演出による『水責火責の女』にも出演したとされ、手元にある百万弗劇場のプログラムを見ると、芝居と共にストリップショーの幕間の「注射（お色気コント）」「桃色強盗（艶笑コント）」と題した景に渥美の名前が載っている。どんな

コントだったの
だろうか。のち
にストリップパ
ーのヒモ兼マネー
ジャーとして知
られ、昭和61年
に浅草フランス
座の支配人とな
る佐山淳は百万
弗劇場で観た渥
美の印象を著書
『女は天使であ
る』の中で「正
直いってあまり
うまいとは思え



浅草百万弗劇場時代の渥美清の舞台写真。写真右が渥美。
(提供/西条昇)

なかつた。テンポがゆるく、もたつく感じなのである。それで、人柄がにじみ出るというか、独特のおかしみがあるてウケていた」と書いている。

百万弗劇場の次は川崎セントラル劇場へ。ここでは、ギョロリとした大きな目玉を売り物に昭和30年代はじめに大阪で売り出した立原博やのちにコント赤信号の師匠となる杉平助が一緒だった。渥美を観るために川崎まで通っていたのがコント・トリオ「ギャグ・メッセンジャーズ」の一員として同40年代に活躍した丘さと志で、「私どもにはやっぱり渥美さんが面白かった。袖から何かヒョイと面白い一言を言ってから舞台上で登場してみたりね」と語ってくれた。雑誌での渥美の口述的エッセイや対談記事をまとめた『きょうも涙の目が落ちる 渥美清のフリーテン人生論』では、川崎セントラル時代について「助平コントばかりやってたんです。僕は色情狂の殿様なんかになって出て、出るとすぐ「一発どうだ」と言うんですよ。その一発を逆にかけて「パツ一どうだ」。ですからそのころ川崎でよくが舞台に出ると「パツ一！」と声がかかった」と語られている。

そして昭和28年、浅草フランス座に入座。八波むと志、佐山俊二、谷幹一、関敬六らと芸を競い、たちまち頭角を現していく。「内外特報」昭和29年2月25日号の「ストリップ劇場 男優さん放談会」にロック座の佐山俊二やカジノ座の三島ケンらと共に出ていますが、おそらくこれが写真入りで渥美が雑誌に載った一番最初だろう。この中で渥美は「もう少しマトモな芝居をね、(略)なんかスケベエたらし

いことをやらんと、観客が笑わないですね。そうではなくて、親父やお袋が見に来てでも喜ばれるようなものですね」と、マトモな芝居への意欲を覗かせて居る。数ヶ月後、渥美は結核と診断され、右肺の摘出手術を行い、同31年に浅草フランス座に復帰するまで療養生活を送った。

その頃、映画界では森繁久彌が、昭和27年『三等重役』、同28年から『次郎長三国志』シリーズの森の石松役、同30年『夫婦善哉』と、喜劇俳優の枠を超えた活躍を見せていた。森繁の特徴はアチャカ的に笑わせるのではなく、腹に一物あるような繊細な感情を細やかに表現して笑わせるところにあった。谷幹一や関敬六によれば、渥美は森繁から大きな影響を受けていたとされている。当初、フランス座で口を大きくひん曲げた表情で笑っていたが、いつしかやらなくなり、関が「そう言えば、最近、あれはもう古いよ」と答えた。また、関は「十銭ハゲのあるオツムの弱い男が綺麗な女性に恋をするなんて役を渥美やんがやると



「内外特報」の「ストリップ劇場 男優さん放談会」のページの写真。写真中央が渥美。(提供/西条昇)

舞台袖に踊り子たちが集まってハンカチで涙を拭きながら観ていたもんですよ」とも語ってくれた。

色川武大はフランス座時代の渥美について「なつかしい芸人たち」で、(あまりドタバタせず)、口で速射砲のようにギャグを連発する。相手と取り交すセリフのほかに、捨てゼリフ、独語がたくさん混ざってくる。(略)ギャグで、出演者を切りつけ、客を切りつけてくる」と書いた。

復帰後の渥美をフランス座の進行係として間近で観続けた井上ひさしは『喜劇役者たち』で渥美の持ち芸の一つが「言い換えの面白さ」と書き、(相手役が渥美清に向って「命はもらった」と凄む。すると渥美清はその相手役に「命っていうのは、落としたら絶対に拾えないという、あれのことですか」と聞き返す。(略)「昨日、ウエスタン映画をみたよ」と相手役が言うのへ「ウエスタン映画っていうのは、もしコロンブスが太平洋から上陸していたらイースタンと呼ばれたにちがいない、アメリカ映画の一種のことですか」と混ぜ返す」と具体例を挙げている。井上らのリクエストにに応じて、その時の役柄を森繁や大河内伝次郎の物真似で演じ通すこともあったという。伊東四朗は早稲田大学の生協でアルバイトをしていた頃に浅草フランス座で渥美が山下清の物真似をするのを観ており、「まだ映画で小林桂樹さんが山下清を演じる前でしたから、凄く似ていてギョツとしましたよ」と語る。谷幹一によると、渥美はインチキ外国語もお手の物だったそうだ。

昭和40年に渥美の付き人になった俳優の石井愷一は、渥美からフランス座時代の「泥棒のコント」の話聞かされ

た。隣りの部屋から男女の営みの声が聞こえる中で、泥棒が忍び込んで箆筒を開けて物を盗もうとすると、隣りからの「広げて!」「持ち上げて!」「もうイッて!」「まだイカないで!」といった声の通りに泥棒が動きを合わせるコントで、昭和47年にフランス座に入ったビートたけしもこのコントを演じている。

昭和32年、渥美に転機が訪れた。男を見るとすぐにハアハアと息づかいを荒くする淫乱な年増女の役を演じて大ウケしている様子を、たまたま電通の人が観て、「テレビに出てみないか」と声がかかったのだ。
(次号・後編へ続く)

(執筆/西条昇)

◇ ◇ ◇
来たる3月9日(日)19時より、浅草・東洋館で『喜劇人 渥美清を語り継ぐ会』が開催されます。企画・出演は元・付き人で俳優の石井愼一と西条昇。ゲストに付き人出身で歌手の鈴木ヤスシ、東洋興業の松倉久幸会長、女優の岡本茉莉。料金は4000円。寅さんファンの方は是非。予約・問い合わせ atsniasakusa@gmail.com

※イベント詳細グーリア31頁参照



フランス座時代の舞台写真(提供/東洋興業株)

補聴器は専門店。

創業40年の安心と信頼

認定補聴器専門店 福祉法取扱店

タスク補聴器 上野店

☎ 03-3839-2531

東京都台東区台東 4-25-5-1F FAX 03-5688-0544

春日通り佐竹商店街入口 新御徒町 徒歩1分

営業時間/10:00~18:00 定休日/日曜・祝日

上野店・板橋店・綾瀬店・竹の塚店・草加店・越谷店